

特別支援学級部会

<県研究主題>

一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

提案1

提案者 平尾 美紀 (相模原地区)

<研究主題>

健康教育を通して、自分を知り、自分を大切に思う気持ちを持ち、よりよく生きようとする心を育む ～特別支援学級「わくわく」の授業より～

1 提案内容

特別支援学級の児童にとって健康教育は、学校生活を楽しく送るためにも、将来の自立と社会参加のためにも大変重要だと考える。そこで「丈夫な体を作ろう」という生活単元学習を通してありのままの自分を受け入れ、自分の体への気付きをきっかけに自己肯定感を高め、さらによりよく生きていく意欲につないでいきたいと考え実践を行った。

(1) 実践内容

- ① 「骨ってなあに」…身長伸び調べ、骨は場所によって形が違うことの学習、骨パズル等の活動をした。
- ② 「骨の秘密をさぐろう」…骨の働きや骨にいい食事、理想の姿勢について学習した。
- ③ 「丈夫な骨を作ろう」…紙粘土で実物大の骨模型づくりをした。
- ④ 「骨にいいことに取り組もう」…「ホネホネたいそう」「カルちゃん集め」「カルちゃんピック」等、楽しみながら運動できるようにした。

(2) ねらいに迫るための具体的手だて

- ① 体験を取り入れた活動…体験を伴う、心に残る学習を多く取り入れた。骨パズル、骨の模型づくり、カルちゃん集め、カルちゃんピック、骨にいい運動等に取り組んだ。
- ② 五感を使った授業展開…目で見て実際に触ってというように実際に五感を使うようにした。
- ③ 具体物の提示…骨の形を知るためにヘルメットやお椀等を使った。絵カードや写真、実物を示すことでイメージしやすくなった。また、理科室の骨を参考に骨模型を作った。
- ④ 視覚にうったえる授業…パワーポイントで画像を提示しながら学習したり、タブレットを使用したりした。また、どの食品にどれだけカルシウムが入っているかを「カルちゃん」という児童が親しみやすい独自の単位を使って表した。
- ⑤ 個に応じた支援…学級ごとに単元目標と評価規準を定めた。
- ⑥ 関わり合いについて…一斉の学習だけではなく、グループに分かれての学習を取り入れている。友達の作業を手伝ったり、友達同士で気兼ねなく関わったりと、良い関わりをもつことができていた。
- ⑦ 専門家・養護教諭等との連携…養護教諭により理想の姿勢とはどんな姿勢かについて、栄養士により骨が丈夫になる食材についての授業をおこなった。療育機関の理学療法士などとの連携もしている。
- ⑧ 家庭との連携…個々にあった支援をするために家庭との連携が大事なため、アン

ケートをとったり、授業参観や懇談会で家での様子を聞いたりしている。

- ⑨ 学習したことを日常の生活に生かすための手だて…カルちゃんピック、ホネホネ体操等の活動を行った。

(3) 成果

視覚に訴えることや体験を取り入れた活動を多く取り入れたため、意欲を持って取り組めた。学習を振り返ってよく思い出すことができた。いろいろな場面で積極的な発言が増えた。

(4) 課題

児童についての共通理解をはかるため、教員間で情報交換が必要でだが、時間の確保が大変である。学校ではできていることを、家庭でもってもらうことは難しい。

2 協議内容

「自分の体を知るための手立てと工夫」という協議の柱に沿って、グループ毎に討議を行い、発表をした。

(1) この提案に関する感想・参考になった点

子どもたちが自分から動きたくなるテーマの設定やストーリーづくりが重要である。みんなで行うことの重要性から、時間の取り方の工夫が必要である。自分たちで手を動かし、見て分かる教材はすばらしい。視覚支援の大切さや長期的な視野に立った計画が参考になった。ゲストティーチャーを上手に使っている。

(2) 「自分の体を知るための手立てと工夫」について、各校で取り組んでいること

体を使ったふれあい遊び、歯の学習での咀嚼ガム、ツイスターゲーム、肥満児の保護者への食事に関する説明、パニックを起こす前に気持ちを落ち着かせる運動等。

3 まとめ

(1) 障害のある子どもにとって健康に関する教育の重要性

障害のある児童は、健康に関する自己管理能することが難しい者が多く、自分でバランスのとれた食生活や適度な運動をとることは課題である。学校と家庭が連携して体を動かす楽しさを体験させる必要がある。

(2) 教育課程に健康教育をどう位置付けるか

教育活動全体に健康に関する視点を取り入れることが望ましい。家庭や地域社会との連携を図りながら日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促す。そして生涯を通じて健康安全で活力のある生活の基礎が培われるよう配慮しなければならない。

(3) 今回の提案から学ぶべき点

教育課程全体の中に生活単元学習をどう位置づけ、それをどう自立活動や体育などに結びつけていくのが大事である。結びつけによってこの学習が生かされる。健康に関する指導を、教育課程にどう位置づけるのか、子どもたちが自分の体に関心を持つような仕組みを盛り込んでいくのか、健康に関する指導の視点も踏まえて教育活動を編成していったらいい。

<研究主題>

一人ひとりの児童の特性をとらえた支援のありかたについて
～個別指導における学習展開の工夫～

1 提案内容

伊勢原市小教研特別教育部会では、一昨年度は、研究会員の困り感アンケートに基づき、「教材教具」「コミュニケーション・SST」「教室環境」「ADL・生活習慣」の4グループで、実践報告を行った。昨年度は授業を通し研究を行い、授業の展開や教材の工夫を考えた。

支援級の規模が大きくなる状況で、個々の実態に応じた授業について、いかに展開したらよいか悩んでいる担任は多い。特性を把握し、それに対応した指導・支援の重要性を捉えテーマを設定した。今回は算数の個別指導について提案する。

(1) テーマに迫る手立て

① 課題設定

対象児童の集中時間の長さ、行動の特性に合わせていくつかの課題を設定する。

- 既習課題（すでにできる課題） 学習を快く始める。
- 引き上げ課題（これから学習し新たに力をつけたい課題） スモールステップで。
- 既習課題や余暇（好きなこと） 学習を肯定的なイメージで終わらせる。

ア 課題設定の留意点

- ・指先の巧緻性、道具の使い方の習熟課題にも取り組む。
- ・意図的に体を動かす場面を作る。
- ・一人で行う課題（自立課題）をあえて設ける。

イ 児童が見通しをもつための工夫

- ・授業の前にスケジュールを提示。課題が終わったら「できました」と告げる。課題の追加はせず、見通しをもてる経験を積む。
- ・作業は左から右へ。できた課題はフィニッシュボックスへ入れる。

② 環境の設定

個別学習の空間、集団学習の空間、教材用棚の場所と空間を分ける。個別学習の空間は、机を前向きに配置し、刺激を少なくする。教材棚は、課題をボックスに分け50音順にしておき、児童が自分で取りに行くようにした。

(2) 授業実践 算数科学習 単元名「とけい」

アナログ時計は日常で多く使われており、時間を視覚的な量としてとらえることができる。対象児童は2名。1名は長針を5分単位で読むことが課題で、もう1名は短針を読むことが課題である。「とけい」の学習を引き上げ課題とし、時計を理解することで、今後児童が生活に見通しをもてるようにしたいと考えた。

①教材の工夫

ア 「短針シート」

時計盤をパウチし、針をホワイトボードマーカーで書き込める。短針が読みやすいよう、色や数字について工夫している。スモールステップで7種類用意。

イ 「でんしゃで5」

レール上にと板を並べ、電車を走らせ5跳びの数を読む。好きなキャラクターがついており、数が言えたらキャラクターを電車に乗せる。

② 成果と課題

- 課題のバランスが良く、無駄な時間がなく集中することができた。
- 「短針シート」は視覚的にわかりやすかった。7時以降の下から上に進むことへの理解が難しかったので、その点について支援が必要である。
- 「でんしゃで5」はおもちゃとして遊びたがった。電車を使わず、5とびの数字の規則性が理解しやすい教材に改善したら、集中して取り組むようになった。
- 児童の実態を分析することで、課題の設定がしやすくなった。

2 協議内容

グループ協議では、「個別指導における展開の工夫」を柱に話し合いを行った。

(1) 展開の工夫

引き上げ課題、体を動かす課題、スケジュールの提示などポイントがはっきりして取り組みやすい。隙間時間がなくよく集中していた。見通しをもたせていく事は重要。課題数、課題順序、スケジュール表の使い方は、個の実態によって検討も必要。

(2) 環境の設定

子どもにとってわかりやすい環境設定は大切である。スペースがすっきりしてやることがわかりやすい環境であった。2名の児童の間についたてを置き教員の移動を少なくする方法もある。

(3) 教材の工夫

「短針シート」はスモールステップで作られていた。それにより課題となる点と自力でできる点が明確にできるのでよい。「でんしゃ5」は、電車の形から改善をした。子どもの様子を見て改善していくことが大切。

3 まとめ

(1) 児童の特性をとらえた工夫

特別支援教育は児童一人ひとりの自立と社会参加に向け、生活に生かせる学習を取り入れる。子どもが何を学び、子どもの何を育むかを大切にしていかなければならない。児童一人ひとりの特性を捉え、課題分析を行い、取り組んでいくことが重要である。

提案された内容は、課題分析がしっかりされており、環境整備や教材の工夫がみられた。日々の積み重ねが効果をあげている。教材は使って反応を見ながら改良し、ステップアップしていくことが必要である。

(2) 合理的配慮

学校では、「負担が過重でない時は、必要かつ合理的配慮をしなければならない」とされている。合理的配慮は新しいことではない。現在どのような配慮をしているか整理し、個々の児童に対し、どのような配慮をしていくか関係者間で合意形成することが必要である。特別支援学級のノウハウを、担任が代わっても継承していき、支援級担任経験者がそのノウハウを、通常の学級でも広めていけるとよい。